平成 28 年度　第 1 回考古学講座

平成 28 年 5 月 21 日

古　代　人　の　心　象　風　景

～古代人の心の投影を器（うつわ）に読む～

神奈川県教育委員会
生涯学習部　文化遺産課
長谷川　厚

１．はじめに

○器（うつわ）からわかること

形式（器形）＝習俗や用途による区分→甕・壺など

型式＝土器の製作技術などに関連する細部の変化＝型式組列（同形式の時間による変化）

→型式組列を構成する個々の時期の形態

土器複合体→様式＝区分された形式（器形）と一定の時期の型式の組み合わせ

⇒人々の暮らし（「生きること（食）」に関して）

⇒人々の創造（「生きること（食）」に対する考え方）←人々の精神（心）を反映

○本講座で明らかにすること

・「生」の根本である「食」の道具の「器（うつわ）」は、神性と人間を媒介する役目をもつ

・「器（うつわ）」の変化は、神性への崇拝・畏怖・対峙する心象風景の反映である

・心象の変化を理解することで、「器（うつわ）」のあり方（変化）が理解できる

２．３世紀から４世紀代まで（祖霊（祖先霊）と自然神への一体化）→「神人共食」と「赤彩」

○定型化する前方後円墳成立前後の様子

ホケノ山古墳：奈良県桜井市に所在。箸墓古墳の東に位置し、全長は約 80 メートル。石囲い木槨という特異な構造、副葬品の置かれた場所、鏡に破砕鏡がみられることなどは弥生時代の伝統と墳丘の形や大型化する点、葺石の存在などは古墳時代の特徴をもつ。古墳時代の定型化した前方後円墳とをつなぐ、弥生時代終末から古墳時代前期初頭の纒向型といわれる前方後円墳。

箸墓古墳：奈良県桜井市に所在。同濠から出土した土器から、布留式最古段階より築造が始まったと考えられ、出土した土器の放射性炭素 14 年代測定では３世紀半ばの結果がでた。全長 278mという大規模な墳丘、正円の後円部と長く発達前方部をもつ整備な対照形、後円部は三段に築盛されて葺石を持つ、最初の「定型化」した大型前方後円墳。

○庄内式土器（弥生時代終末～古墳時代前期）から布留式土器（古墳時代前期）の成立

→前方後円墳成立のプロセス（ホケノ山古墳→箸墓古墳）に深い関係

供献土器～二重口縁壺など

小型三種精製土器のセットが完成～有段口縁鉢・小型丸底壺・小型器台

⇒日本列島で広汎に共通して広がる＝古墳時代の始まり

○前方後円墳に埋葬された首長層の葬送儀礼（祭祀）と器のあり方の成立

・葬送儀式（祭祀）を通じて埋葬された首長→祖霊（守護神）となる＋権力の誇示の側面

・次期継承者は「神人共食」の葬送儀式を通じて首長の神性を受け継ぐ

・古代の人々は神性を付与された首長の霊を守護霊として祭る

・守護霊は自然神を含み広く社会生活基盤全体を包括し、人々の心の行動原理となった

・人々は「神人共食」を通じて、神性のもとに保護される証として器を受容する

（直会（なおらい）、「ハレ」と「ケ」）

→木製器・籃胎（らんたい）漆器の使用　、

＊籃胎漆器とは：竹を裂いて薄く削って編んだ素地すなわち籃胎（籃は竹で編んだ籠）に，漆を塗り重ねた器物。

〇赤彩のもつ意味

・ホケノ山古墳石囲い木槨内の舟形木棺の内側の水銀朱
桜井茶臼山古墳の竪穴式石室内など古墳時代の石室に多く使われる
土器の表面には弥生時代から特に盛んになる

・赤彩の赤い顔料にはベンガラ・鉛丹・辰砂がある
ベンガラは赤鉄鉱の粉末で旧石器時代から使用される
鉛丹は鉛を酸化させたもので、奈良時代から使用される
辰砂（硫化水銀の一種）をすりつぶした水銀朱の使用は縄文時代から確認され、弥生時代後期に本格化する
→赤は血の色に通じ、生命力を示す
辰砂は防腐剤の役割をもち、墓に敷き詰められた理由の一つなる
道教では不老不死をもたらす仙薬として特に珍重し、使用に関連があったかもしれない
⇒古代の人々が神性の表徴の強化、保護を期待した役割があった

３．５世紀から６世紀まで（祖霊と自然神との分離、自然神との対峙、新たな神との出会い）

〇群馬県渋川市金井東裏遺跡の発掘成果

・上信自動車道の建設に伴い平成 24 年９月から始まった発掘調査
平成 24 年 11 月、６世紀初頭に榛名山の噴火で発生した火砕流による埋もれた溝の中から
「甲（よろい）を着（き）た古墳人」が発見
⇒（祭祀主催者？）、鉄鏃、赤玉、土器（赤彩）・石製模造品を中心とする
祭祀遺構、近接して女性・幼児・乳児の遺体
↓これらを理解するための示唆的な文献記事

・常陸国風土記　行方郡段　『夜刀の神説話』
『…是に、麻多智、大きに怒の情を起こし、駈逐らひき。…』
⇒祭祀の主体が集落＝地域単位の代表者が実施

〇５世紀から６世紀を通じての変化の流れ

・神性に対する人々の心の変化（金井東裏遺跡と常陸国風土記に関連して）
金井東裏遺跡＝小札甲を着た人物が榛名二ッ岳に向かって・・・
常陸国風土記＝土地の神（夜刀の神）を『甲鎧を着被けて、自身仗を執り、打殺し』た
⇒人々の神性に対する変化＝自然神に対峙する様子
⇒祖霊（守護霊）と自然神への祭祀の分離

・器への心象の反映
金井東裏遺跡の祭祀遺構のあり方
→土器を集積する祭祀（丸底埦の出現＋石製模造品など）→葬送祭祀儀礼とは別物
神奈川県平塚市沢狭（さわざま）遺跡の場合
土器の集積と石製模造品を中心とする祭祀遺構（金井東裏遺跡より古い５世紀中葉）
石製摸造品は剣形、鏡形、勾玉及び臼玉から構成
祭祀遺構からの器は平底の土師器埦と丸底の土師器埦が主体となる（大半が赤彩される）
→３～４世紀の器の組み合わせから大きな変化
⇒自然を人々がコントロールできる（しようとする）対象としての心のあり方への変化
背景：絶対的権力をもつ首長層のもとで、大規模な農地開拓（特に低地を中心とする）の進行
地域の有力家族の成長→積極的な開拓による農地開拓（６世紀以降本格化）

＊石製模造品とは？：実用品を滑石などのやわらかい石材で模造した儀器。武器、武具などにわたり、古墳時代中期の墳墓から発見されることが多いが、後期にも及んでいる。なお、祭祀遺跡からも発見され、祭祀用品とされている。

○５世紀の社会全体の動向

・首長の絶対的権力の成立→畿内での大型前方後円墳の成立（「巨大古墳の時代」「倭の五王」）

畿内：大阪府堺市 大仙古墳(486m) 大阪府羽曳野市 誉田御廟山古墳(425m)

地方：岡山県岡山市 造山古墳(360m) 群馬県太田市 太田天神山古墳(210m)

⇒絶対的権力（豊かな経済力、武力）のもとで、祖霊（守護霊）の神性を継承の必要性が弱まる

→副葬品の変化

・朝鮮三国との関連の強まり

国際情勢を踏まえて朝鮮半島から渡来する人々（渡来人）が本格化する

→技術・文物・思想・制度が伝来する

→須恵器製作技術、金属（鉄）加工技術、馬の飼育法の伝来、カマドの使用、積石塚（渡来人の墓制）

→思想（仏教、儒教、道教など）６世紀に本格化

・渡来人の足跡

→東山道ルートで関東、東北へ（点としての広がり（人の移動、移住））

→二次的な渡来文化（技術の在地化）の広がり（Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ）（５世紀代を通じて、６世紀にほぼ完了）

→竪穴住居のカマドの付設、須恵器製作技術の伝来→土師器生産に影響

○５世紀を通じての人々の心象風景と器のあり方の変化

・５世紀の社会全体の動向は首長の神性に対する考え方の変化

・自然神への対し方の変化→古代人の心象の変化

・器のあり方が一変し、埦形の土師器を中心とする器のあり方へ変化した

４．６世紀から７世紀まで（祖霊の変化、自然神の位置付けの変化、新たな神の受容、仏教の受容と拡散）

○６世紀の社会全体の動向

・前方後円墳墳の変化＝規模の縮小、横穴式石室の築造→６世紀終末に築造が終わる

高塚古墳自体の築造も減少→７世紀にかけて終了

→葬送儀礼の意味の変化＝黄泉戸喫（よもつへぐい）（葬送観の変化）：「ケガレ」の観念の発生

・群集墳の出現→６世紀に入り本格化（例：神奈川県秦野市桜土手古墳群）

→地域の有力家族の成長→積極的な開拓による農地開拓（６世紀以降本格化）

→首長の祖霊（守護霊）から氏族の祖霊への変更と自然神への祭祀の明確な分離

＊横穴式石室について：古墳の横に穴をうがって遺体を納める玄室へつながる通路に当たる羨道（せんどう）を造りつけた石積みの墓室。高句麗の影響が、5 世紀頃に百済や伽耶諸国を経由して日本にも伝播したと考えられ、主に 6～7 世紀の古墳で盛んに造られた。石室そのものは広い空間であり、一人の死者だけでなく親族や血族の死者を一緒に葬ることができる。今までの竪穴式石室の一人の死者（首長）を葬るという葬法とは大いに違い、埋葬観念や埋葬施設に変化が生じた。

＊群集墳について：一定の地域に密集して造営された小古墳群。５世紀から７世紀まで築造された。とくに、６世紀代になって、全国各地で爆発的につくられた．４～５世紀の古墳の多くが支配者の単独埋葬であるのに対し．群集墳は径10～30mの規模で横穴式石室に数体～十数体の遺骸が埋葬されていることが多く、地域単位の支配者あるいは有力家族の家族墓と推定される。

・二次的な渡来文化の定着

→竪穴住居のカマドの付設

→須恵器製作技術（古墳時代の関東地方では首長層による体系的な生産体制は定着しなかった）

→在来の器作りへの影響＝「須恵器指向型土師器」（＝須恵器模倣坏）の製作

・思想、制度の本格的導入と広がり

→仏教公伝：552 年（壬申）説『日本書紀』

538 年（戊午）説『上宮聖徳法王帝説』『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』

→仏教儀式の儀器の古墳埋葬＝佐波理鋺（銅鋺）（例：伊勢原市登尾山（とおのやま）古墳など）

→「漢神（かんしん、からのかみ）」：『日本書紀』皇極天皇元年（642）七月戊寅条の記事

「日照りが続いたので雨乞いのため、村々の祝部の教えにしたがって、牛馬を殺して諸社の神を祀りあるいは、しばしば市を移したり、河伯（河の神）に祈ったりしたがまったく効果がなかったと群臣が語り合ったのに対し、蘇我大臣蝦夷は、諸寺で大乗経典を転読悔過し、雨を祈ろうと提案した」

→新羅系の民俗儀礼、習俗か？

○６世紀の具体例

・神奈川県横須賀市鉞切（なたぎり）の場合

6 世紀中葉から後葉を中心とする時期の遺跡、平潟湾に面する丘陵部と海岸部の境界に位置する

多数の土師器坏が出土→切断した牛首を埋葬した土坑を中心に集中する、周辺に焚火痕もあり

⇒丸底埦はわずかで、「須恵器指向型土師器」（須恵器模倣土師器坏）で占められる

土師器坏は須恵器の坏身、坏蓋を模倣した二種の形態で、赤彩と黒彩されたものがある

⇒丸底埦から須恵器模倣土師器坏へ＝５世紀代からの大きな変化　→心象風景の変化

○器の変化と心象風景の関連

・須恵器模倣土師器坏の特徴

→きわめて企画性が高く、完成度が高い、生活什器としての性能は高い：現実的な使用

→赤彩・黒彩が大半に施される：「神人共食」の流れは基層に残す（黒彩は別の意味づけ）

→「殺牛」儀礼に伴って発見：「漢神」儀礼？→「新たな神」との共存

・心象風景との関連

神性への基層意識として「神人共食」は残存（赤彩）→血縁集団（氏族）の祖霊への尊重

新たな渡来系文化を背景にした神性の意識の重なり

→「須恵器」＝新来の器としての価値→新たな葬送観

「佐波理鋺」＝仏教文化の一要素（量は少なく、古墳被葬者が仏教儀式に用いていたのではない）

「漢神」＝朝鮮半島経由の雨乞いなどの儀式

関東及び周縁（静岡、山梨、長野、新潟）から東北地方圏の独自の共通基盤形成（黒彩）

⇒伝統的な「神人共食」の意識（赤彩）の上に、渡来系の神性意識各種が重層化する構成となる

器のあり方は、埦形（伝統的な神意識の象徴）から、新来の器として新しい価値観の象徴としての須恵器を模倣した土師器坏が器のあり方の中心となった

○７世紀の社会全体の動向

・国家の中央集権化への道

朝鮮半島での緊張関係＋中国（隋・唐）での巨大強権国家の成立

推古（厩戸王）・天智・天武・持統朝による律令国家の完成への道程

・古墳築造の意義の消失と仏教の浸透

６世紀代で前方後円墳を含む大型古墳の築造は停止→本来の意義をもつ古墳は終焉

→終末期古墳（高松塚古墳、キトラ古墳）、一部の方墳、群集墳、横穴墓の築造は続く

仏教の本格的導入＝寺院が各地で造営される

→例：飛鳥寺（『日本書紀』用明天皇２年（587 年）に蘇我馬子が建立を発願）

茅ヶ崎市下寺尾廃寺、川崎市影向寺など

○７世紀の動き

・小田原市三俣遺跡の場合

大磯丘陵の西縁辺の相模湾に面する森戸川河口付近に立地

５～６世紀代を通じて関連する遺構が形成→７世紀初頭に石組遺構が構築される

→石組遺構に伴い祭祀が行われた形跡はない

→須恵器模倣土師器坏が出土＝基本的には６世紀代との延長線で捉えられる

・土師器の新動向

畿内の動向

→６世紀末から朝鮮三国の仏教文化の一要素として将来された佐波理鋺（銅鋺）を主とする金属製容器の直接的模倣による土器様式が成立

→高脚付佐波理鋺（鋺 C）→須恵器坏 C

→高台付佐波理鋺（鋺 B）→須恵器坏 B

→無台佐波理鋺（鋺 A）→土師器坏 C・A

→同一器形の法量による器種分化＝「律令的土器様式」の成立

⇒独自の神々との祭祀形態をもっていた支配層がまったく異質な仏教文化の導入や寺院の建立へ動き出す→律令制に基づく国家体制の整備へ

東国の動向

→須恵器模倣土師器坏の型式の存続（赤彩なし）

→７世紀中葉からの半球形の土師器坏の出現

→口唇部の形態（無台佐波理鋺（鋺 A）の模倣）

→内面のヘラミガキ（佐波理鋺（鋺 A）の内面の光沢の模倣）

⇒７世紀中葉から畿内の土器様式を反映した変化が始まり、主体となる器形が須恵器模倣型から金属製容器模倣への指向が顕著に現れる→８世紀前葉まで型式的変化の連続となる

○６世紀から７世紀への心象風景の変化

・４世紀以降６世紀までを通じた神性の捉え方の流れが、大きく変化する

・仏教文化の一要素である「佐波理鋺」を軸とする器のあり方の再編制が行われる

・律令国家の公民としての生活→国家仏教と在来の神意識、概念の整理統合

・伝統的な「神人共食」の意識と神性の捉え方は基層には残った

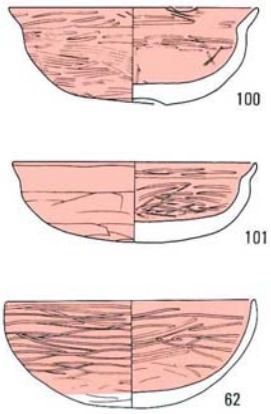
→大宝令「儀制令 春時祭田条」　『凡春時祭田之日集郷之老者一行郷飲酒礼』の解釈

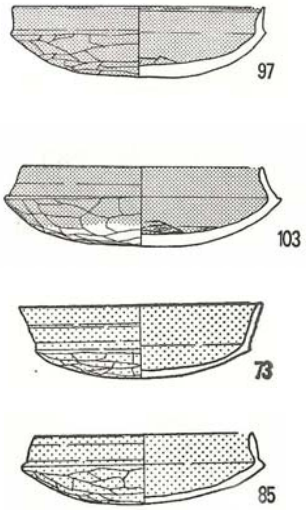
「皇祖神の霊力の賦与の代償として、初穂を名目とする租税」を納める

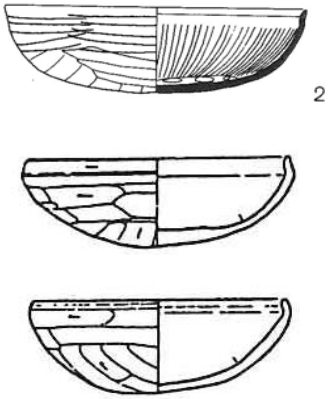
５．まとめ

４世紀から７世紀までの古代人の神性の捉え方と変化をまとめると、以下のとおりになる。
神性の捉え方と変化は、古代人の心象風景を語っている。

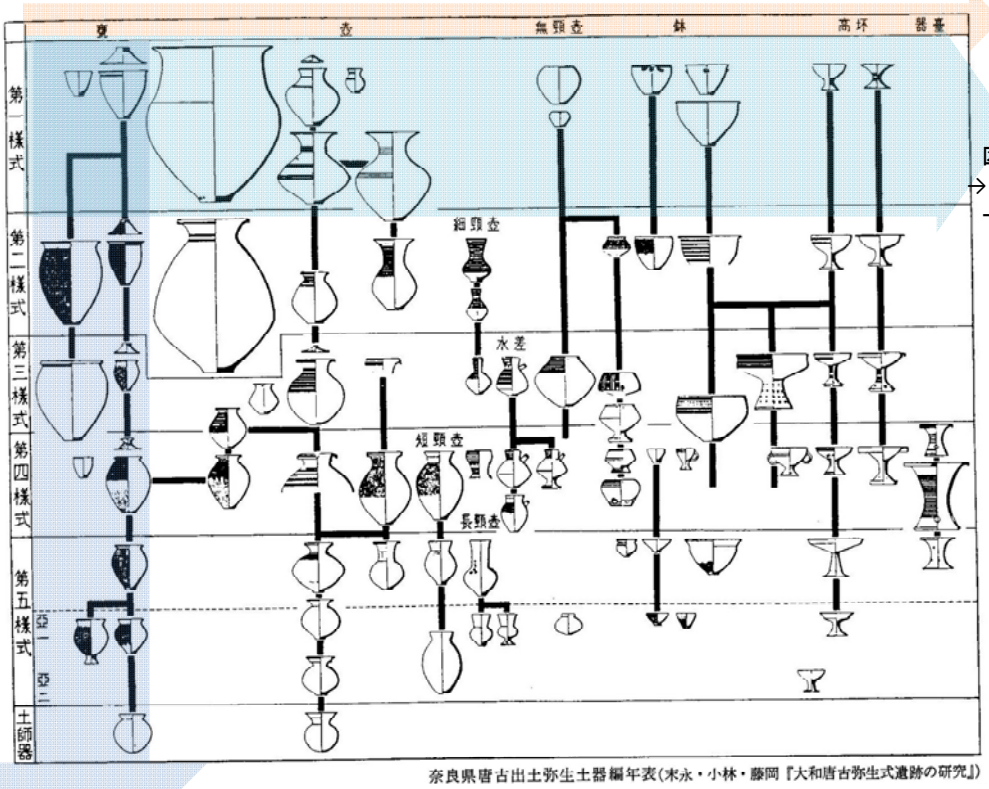
４世紀	５世紀	６世紀	７世紀
＜神人共食＞ 祖霊 ＋ 自然神	祖霊 （首長の絶対的権力の保有）	祖霊 （氏族単位での祖霊の尊重）	祖霊 （基層意識として）
	自然神 （祖霊との区別）	自然神 （祖霊との明確な分離）	自然神 （独立した意識として）
	渡来系文化の思想の広がり	外来の神及び神意識 （須恵器）	律令国家の成立を通じての国家仏教と在来の神意識の整理、統合
		外来の神及び神意識 （佐波理鋺）	
		外来の神及び神意識 （漢神）	







【時間の流れ】
古
↓
新



奈良県唐古出土弥生土器編年表(末永・小林・藤岡『大和唐古弥生式遺跡の研究』)

甕・壺などの形
→**形式**ないしは**器形**
(Form)
→習俗や用途に関連

区分された**形式(器形)**
と
一定の時期の**型式**
の組み合わせ
↓
土器複合体
(Complex)
↓
様　式
(Style,Mode)
・人々の暮らし
・人々の創造
・人々の精神(心)

土器の製作技術などに関連する細部の変化＝型式組列
→**型式組列を構成する個々の時期の形態＝型式(Type)**

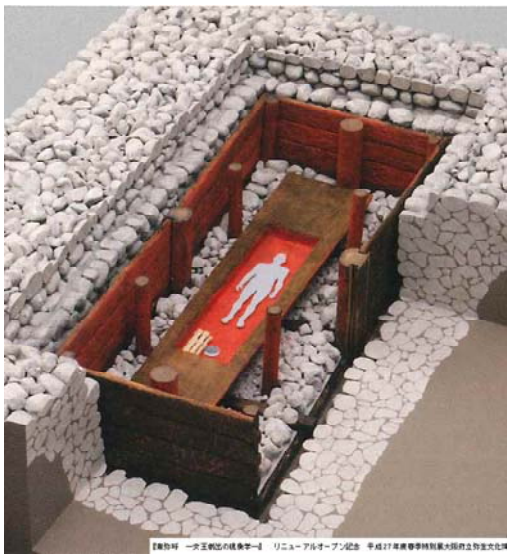
○器からわかること（p1）2

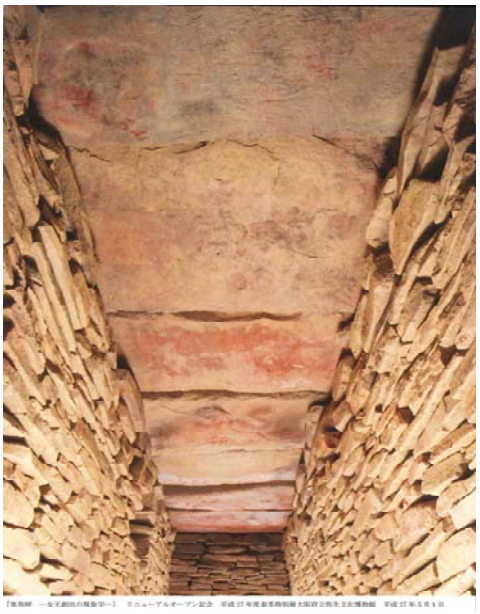
○庄内式土器(弥生時代終末～古墳時代前期)から布留式土器(古墳時代前期)の成立

→ 前方後円墳成立のプロセス(ホケノ山古墳→箸墓古墳)に深い関係
　供献土器～二重口縁壺など
　小型三種精製土器のセットが完成～有段口縁鉢・小型丸底壺・小型器台
　⇒日本列島で広汎に共通して広がる＝古墳時代の始まり

○庄内式土器（弥生時代終末～古墳時代前期）から布留式土器（古墳時代前期）の成立（p1）7

○赤彩のもつ意味





→赤は血の色に通じ、生命力を示す

⇒古代の人々が神性の表徴の強化、保護を期待した役割があった

○赤彩のもつ意味（p2）9

○常陸国風土記　行方郡段『夜刀の神説話』

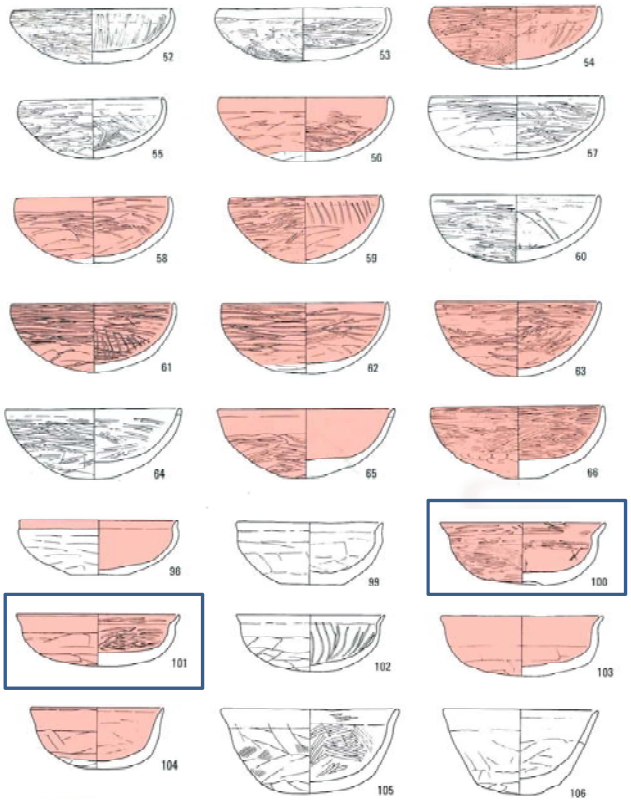
『常陸国風土記』行方郡（なめかたぐん）段

古老（ふるおきな）のいへらく、石村（いはれ）の玉穂の宮に大八洲（おほやしま）駅（しる）しめしし天皇（継体天皇）のみ世、人あり。箭括（やはず）の氏の麻多智（またち）、郡より西の谷の草原を截（きりはらひ）、墾闢（ひらきて）新に田に治（は）りき。此の時、夜刀の神、相群れ引率て、悉尽（ことごとに）到来たり。左右に防障（さへ）て、耕佃（たつくらしむること）なし。（俗（くにひと）いはく、蛇を謂ひて夜刀の神と為す。其の形は、蛇の身にして頭に角あり。率引て難を免るる時、見る人あらば、家門を破滅し、子孫継がず。凡て、此の郡の側の郊原（のはら）に甚（いと）多に住めり。）是に、麻多智、大きに怒の情を起こし、甲鎧を着被けて、自身杖（ほこ）を執り打殺し駈逐らひき。乃ち、山口に至り、標（しめ）を堺の堀に置て、夜刀の神に告げていひしく、「此より上は神の地と為すことを聴さむ。此より下は人の田と作すべし。今より後、吾、神の祝（はふり）と為りて、永代に敬ひ祭らむ。冀くは、な祟りそ、な恨みそ」といひて、社を設けて、初めて祭りき、といへり。即ち、還（また）、耕田（つくりだ）一十町余を発（おこ）して、麻多智の子孫、相承けて祭を致し、今に至るまで絶えず。

其の後、難波の長柄の豊前の大宮に臨軒（あめのしたしる）しめしし天皇（孝徳天皇）のみ世に至り、壬生連（みぶのむらじ）麿（まろ）、初めて其の谷を占めて、池の堤を築かしめき。時に、夜刀の神、池の辺の椎株に昇り集まり、時を経れども去らず。是に、麿、声を挙げて大言（たけびらく）、「此の池を修めしむるは、要は民を活かすにあり。何の神、誰の祇（くにつかみ）ぞ、風化（おもむけ）に従はざる」といひて、即ち、役の民に令（おほ）せていひけらく、「目に見る雑の物、魚虫の類は、憚り憚るところなく、随尽（ことごとに）打殺せ」と言ひ了はる応時（そのとき）、神（あや）しき蛇避け隠りき。謂はゆる其の池は、今、椎井の池と号（なづく）。池の回に椎株あり。清泉出づれば、井を取りて池に名づく。即ち、香島に向ふ陸の駅道なり。

岩波日本古典文学大系

○常陸国風土記　行方郡段　『夜刀の神説話』（p2）15



○神奈川県平塚市沢狭（さわざま）遺跡（p2）25

祭祀遺構からの器は平底の土師器埦と丸底の土師器埦が主体となる（大半が赤彩される）

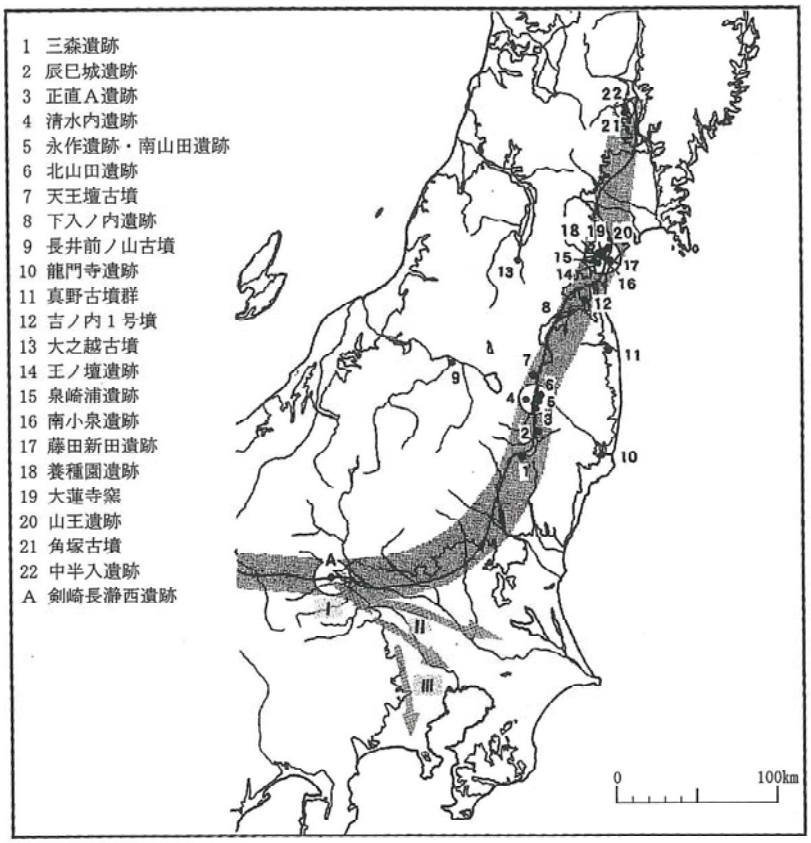
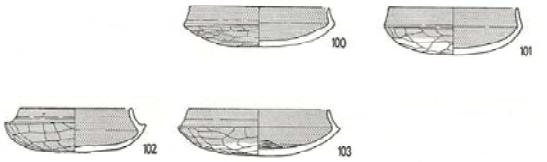


図2　陸奥に至る5世紀代の朝鮮系資料の分布とそのルート
および関東圏への広がり
（亀田2003・61頁図4に加筆して作成）

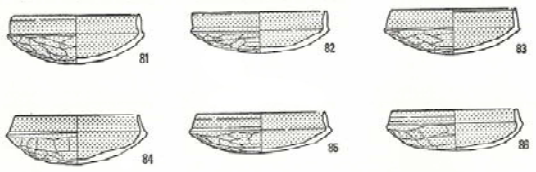
○渡来人の足跡（p3）31

須恵器坏蓋模倣土師器坏（赤彩）

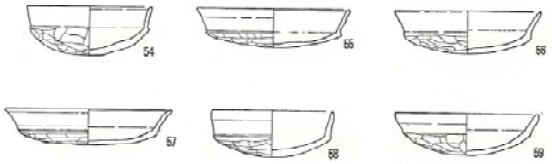
須恵器坏蓋模倣土師器坏（黒彩）



須恵器坏身模倣土師器坏（赤彩）



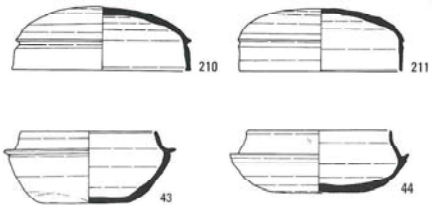
須恵器坏身模倣土師器坏（黒彩）



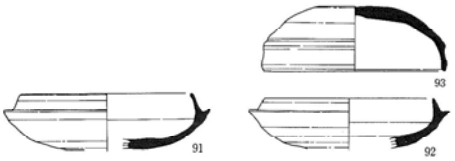
須恵器坏蓋模倣土師器坏（無彩）

「須恵器指向型土師器」（須恵器模倣土師器坏）
須恵器の坏身、坏蓋を模倣した二種の形態、赤彩と黒彩

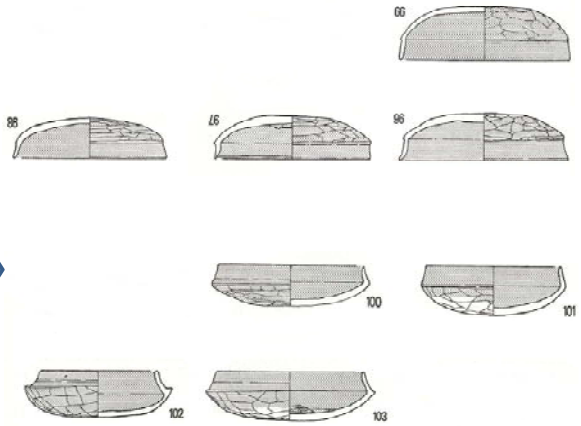
○鉞切遺跡出土　土師器坏（p4）42



沢狭遺跡出土須恵器蓋・身（5世紀）

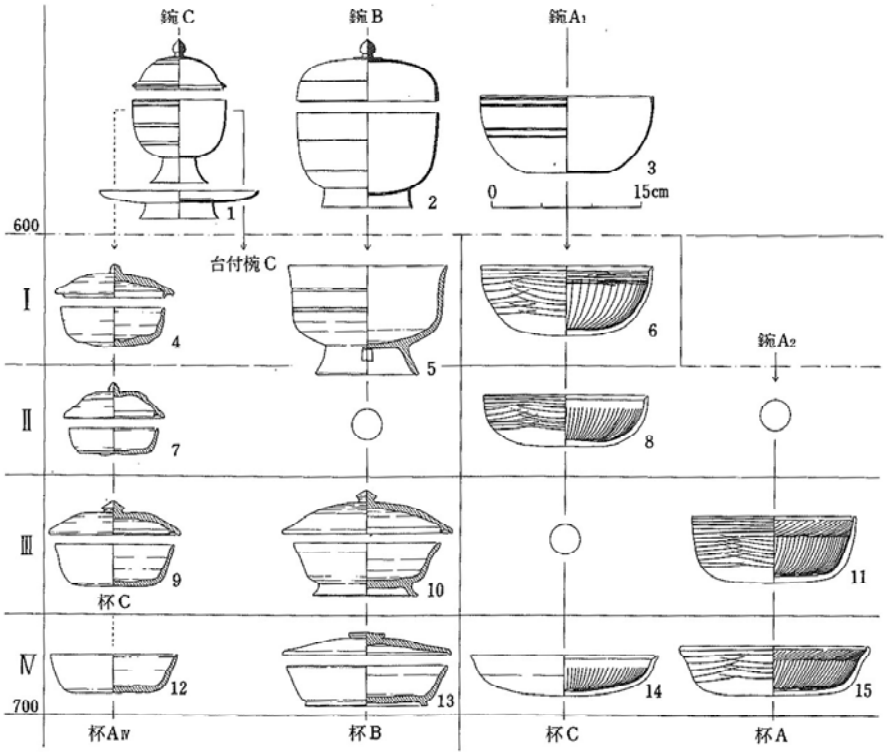


三俣遺跡出土須恵器蓋・身（6・7世紀）



「須恵器指向型土師器」（須恵器模倣土師器坏）

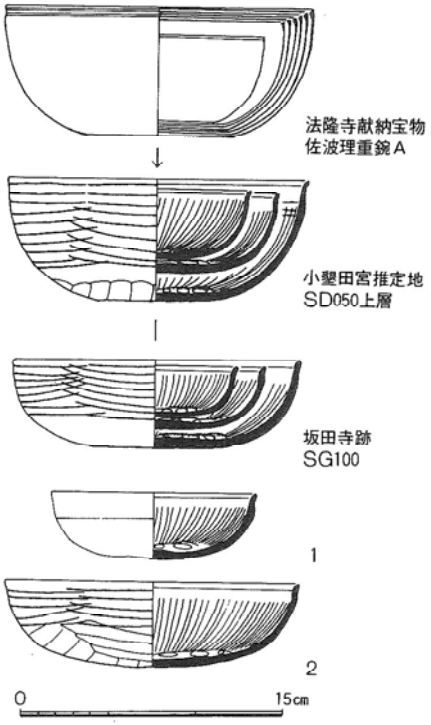
○「須恵器指向型土師器」（須恵器模倣土師器坏）　（p4）43



第２図　鋺と食器の発展（1・3群馬県　観音塚古墳　2千葉県　金鈴塚古墳　4・9・10大阪府　陶邑ＴＫ217号窯　5埼玉県　柏崎4号墳　6大阪府　難波宮下層遺跡土壙３　7・8奈良県　坂田寺跡池SG100　11大阪府　船橋遺跡　12大阪府　陶邑ＭＴ21号窯　13・14・15奈良県　藤原宮東大溝ＳＤ105）

○金属製容器の直接的模倣による土器様式の成立　（p5）55

第４図　正倉院宝物　佐波理加盤



第４図　鋺Aと土師器杯Cの変遷

同一器形の法量による器種分化＝「律令的土器様式」の成立

○同一器形の法量による器種分化＝「律令的土器様式」の成立　（p5）56

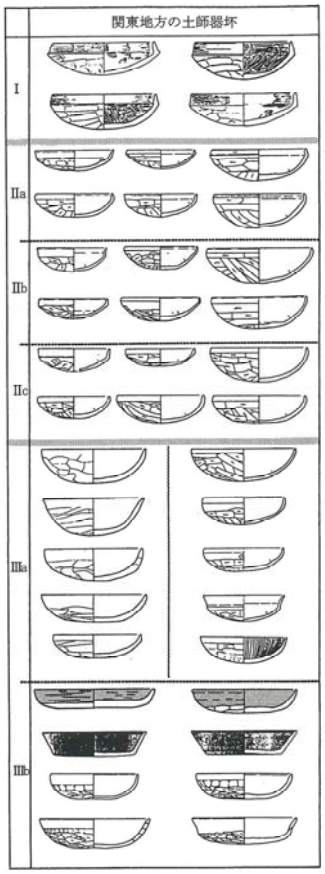


図5　関東地方の7～8世紀の土師器坏のモデル

東国の動向

→須恵器模倣土師器坏の型式の存続（赤彩なし）

→7世紀中葉からの半球形の土師器坏の出現

→口唇部の形態（無台佐波理鋺（鋺A）の模倣）

→内面のヘラミガキ（佐波理鋺（鋺A）の内面の光沢の模倣）

⇒7世紀中葉から畿内の土器様式を反映した変化が始まり、主体となる器形が須恵器模倣型から金属製容器模倣への指向が顕著に現れる
→8世紀前葉まで型式的変化の連続となる

○同一器形の法量による器種分化＝「律令的土器様式」の成立　（p5）57

【引用参考文献】

公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2014　『甲（よろい）を着（き）た古墳人だより　特集号　世紀の発掘638日全記録』

公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2015　『これが金井東裏遺跡!!』

公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2013　『甲（よろい）を着（き）た古墳人だより　』

大阪府立弥生文化博物館　2016　『卑弥呼　―女王創出の現象学―』　平成27年度春季特別展

神奈川県教育委員会　2015　『発掘された御仏（みほとけ）と仏具　―神奈川の古代・中世の仏教信仰―』

平成26年度かながわの遺跡展・巡回展

金目郵便局建設用地内遺跡発掘調査団　1998『神奈川県平塚市沢狭（さわざま）遺跡発掘調査報告』

かながわ考古学財団　2003　『三俣遺跡Ⅱ（F地区）』かながわ考古学財団調査報告80

かながわ考古学財団　1999　『発掘されたいにしえの国府津　三俣遺跡』

長谷川　厚　1991　「東国における「律令的土器様式」の成立と展開について」『古代探叢　Ⅲ』

長谷川　厚　2006　「土師器からみた古代社会の鳥瞰」『陶磁器の社会史』

長谷川　厚　1985　「古代東国における土器生産」　『古代探叢』

西　弘海　1986　「土器様式の成立とその背景」　『土器様式の成立とその背景』　真陽社

西　弘海　1986　「平城宮の土器」　『土器様式の成立とその背景』　真陽社

西　弘海　1986　「七世紀の土器の時期区分と形式発展」　『土器様式の成立とその背景』　真陽社

西　弘海　1986　「法隆寺出土の七世紀の土器」　『土器様式の成立とその背景』　真陽社